

爾來寛政の始迄に。あまたを著はせり。大通人穴さがし。御物好茶白藝。芝居好目くら仙人。目あき仙人等皆其中なり。通笑述作の草子は。多くは教諭を旨とするを以て。世人教訓の通笑と呼べりとぞ。文化九年八月廿七日享年七十四にして歿す。法號覺法全心。淺草祝言寺に葬る。

唐來三和

三和は加藤氏伊豆亭と號す。元武家に生れしが。放逸にして家を棄て。書肆蔦屋重三郎に寄り。うれより本所松井町ある。妓院の夫ともかりしが。うこをも出で。後甚だ落魄したりける頃。

繩の帶身にはつゞれのままつとして。

かねが敵にめぐりあはゞや。

また辭世の狂歌と聞えしは。

かりの世の地水火風をもとすかり。

これで五倫のさと引きもかし。

歿年詳からず。草子の著述には。善惡邪正大勘定。忠臣一心藏。三教色和唐珍聞などありとや。

芝全交

通稱山本藤十郎といひて。西久保神谷町に住す。大藏流の狂言師にて。旁ら戯作の業を好み。合羽大佛縁起。適一聲女暫。南無大通佛開帳。御手料理 大悲千録本等を著せり。寛政五年六月十八日身まかりきといふ。

森羅亭萬象

名は中良。中原氏。字は虞臣。桂林と號す。初は森島甫齋といふ。

官醫桂川甫周法眼の舍弟あり。平賀源内の門に入て。森羅萬象の號を譲らる。源内初め萬象と戲號せり。又二代目風來山人。天竺老人とも號し。院本の作名を源平藤橘といひ。狂名を竹枝爲輕といへり。蘭學の業餘。稗史を戲作するに。誠に巧手にして。師風あり。万象亭戲作濫觴。田舎芝居。夫從そと以來記かど世に聞ゆ。文化五年十二月四日歿す。年五十五。二本榎上行寺に葬る。

四方山人

名は單字は子麴。南畝と號し。又蜀山人と號す。杏花園。石楠齋。遠櫻山人等の別號あり。通稱太田直次郎。後七左衛門と改む。幕府の吏あり。翁和漢の學に通じ。古今雅俗讀まざる書なく。知らざる事かじ。又天明風の狂歌を唱へて。海内を風靡し。四

方赤良と狂名せり。謂はゆる癡惚先生と云ふ者是かり。旁ら草子の戲作を好みて。著述あまたあり。文政六年四月六日歿す。歳七十五。白山本念寺に葬る。法名杏花園心逸日休といふ。辭世の句は。

時鳥あきつるかた身初鱈魚

はると夏との入相のかね

翁の事蹟には。逸興の物語あまたあり。年譜行狀とも。別記あれは省けり。

朱樂菅江

名の景貫。字は道甫。淮南道と號す。通稱山崎郷之助とて。幕府の吏あり。粗和漢の學に涉り。最も和歌を好む。後四方山人等の流に入り。狂歌を以て名聲籍甚たり。戲作の草子には。大抵

御覽と云ふ名高し。寛政十二年十二月十二日歿す。青山久保町青原禪寺に葬る。法號運光院泰安道久と云ふ。歿期の口々さみに。

執着の心や娑婆に残るらん。

よし野乃櫻さらしかの月。

北川眞顔

眞顔を紀氏にて。俗稱を嘉兵衛といふ。狂歌堂四方歌垣と號す。數奇屋川岸に住める。家守あり。始め戀川春町に従て稗史を作り。好町と號す。又寛政中鹿杖部山人と著名して。青本の作あり。後四方の社中とありて。狂歌を物し。其名を鹿津部眞顔といふ。遂に此名を以て稱せらる。晚年俳諧歌を中興して。大に行はれ。此に因て京師より俳諧歌場の號を賜はりき。文

政十二年六月六日享年七十七歳にして歿す。法號俳諧歌場壽譽福阿眞顔といふ。小石川光圓寺に葬る。辭世の狂歌を。

味く食ひ暖かく着て何ふろく。

なぐろぢ七つ南無あみた佛。

六樹園

名は雅望。石川氏。俗稱五郎兵衛。五老また蛾術齋と號す。父は糠屋七兵衛とて。小傳馬町の旅亭なりしが。雅望に至りて四谷に移り。又靈岸島に寓居して。遂に家業を廢せり。雅望洽聞多識。最も古言に明かにして。著書甚た多し。中にも雅言集覽の如き。今に至て學者之に頼る。いつの頃にか狂歌の社中に入りて。宿屋の飯盛と號す。又戯れに稗史を作れり。則ちおみの住家物語。東まより。飛彈匠物語。近江縣物語等。此他小本の

著述數ふるに違あらず。併しなから狂歌小説の如きは抑く餘緒なり。翁天資聰敏。才藻優麗にして。學窺とさる所なり。和歌の格調の如き。深く思を致す所なり。故に一時専門の名家も。其下風に立ち。四方贊を執て業を乞ふ者さへ多かりき。天保元年閏三月廿四日病て歿す。享年七十八。法號六樹園院臺譽五老といふ。淺草黒船町正覺寺中哲相院に葬る。其頃京師の公卿翁の著書を覽て感嘆措かず。奏して授くるに宗匠の號を以てし。之を法眼に叙す。宣文江戸に到る時。翁既に歿せり。識る者らぬ大に遺憾となすといふ。

芍薬亭長根

姓は菅原。名は長根。始め潜亭と號し。狂歌に淺黄裏成と名告る。本阿彌光悅七世の孫にして。歸遊と號す。下谷三枚橋に住す。故に三橋亭の別號あり。明誠堂喜三二を慕ひて。草子を戯作し。終に喜三二の名を譲られたりき。弘化二年二月十日七十八歳にて歿す。病中小島春菴の治療をうけて。

煎豆豆花も咲らん春の庵

谷中妙法寺に葬る。

窪田俟満

俗稱安兵衛。尙左堂と號す。狂歌を好みて南陀伽紫蘭と戯名と。又畫を能くして爲一翁と稱す。曾て回向院前猫茶屋の事を戯作して通ひけり。猫のわさくれと云。大に行はれたりとぞ。

南仙笑楚満人

通稱楠彦太郎といふ。芝宇田川町の書肆なり。一説に醫を業

として仙向と稱し、旁ら手跡指南をも著し、敵討の草子の中興して、其名を顯はせり。文化四年三月九日歿す。法號只但受樂翁。西久保心光院に葬る。

振鷲亭

名は貞居。猪苻氏。通稱與兵衛。本船町の家守なり。畫事を鳥居清長に學ひ、又戯作を好み、著書數十部あり。中に「跡次妹背山」俊徳丸復讐、猫股屋敷、自惚鏡、客衆一鳥居など世に聞ゆ。晩年甚だ流落して、手跡指南を業とし、わづかに口を糊はぐが、ある夜坭酔のあまり、水に陥りて死せりといふ。

中山鬼卵

通稱大須賀知白。栗枝亭と號す。遠州日阪の人にして、讀本の著作あまたあり。もと煙草を鬻ぎて業とせり。ある時白川樂

翁侯。鬼卵の店頭を通行するに、其家の障子に、一首の狂歌を  
書付たり。

世の中の人と煙艸のよしあしを。

けふりとなりて後にはさう知れ。

侯見て嘆賞措かず。遂に旅亭に召見て、時服を賜へり。文政十三年の頃、香川景樹あづまへ下る道すがら、鬼卵の家を訪ら  
ひしに、折しも鬼卵の妻身まかりし程なりければ、景樹之を  
悼みて。

もろともい老ての後の若草の。

妻の別れはいかにかなしき。

思ひやる此中山の夜なきいと。

よなきなかん君がこころを。

と詠じて慰めけりとか。鬼卯和歌の方に深くして。専門の名家にもうらかく交らひとあり。文政六年二月廿三日歳八十三にして歿す。

高井蘭山

名は伴寛。字は思明。通稱又左衛門といふ。幕府の吏にして與力ありとも。又旗下の士某の用人ありとも云ふ。著述は教訓の書。又通俗演義の類。さては讀本のみにして。草雙紙洒落本等の作絶えておと。讀本にて世に行はれとは。三國妖婦傳。孝子嫩物語。星月夜顯晦録等あり。

小枝繁

通稱は露木七郎次。絳山。又歌醜陳人と號す。水府御主殿附の役人ありと云。これも讀本の著作を專たと。景清外傳。小栗外

傳。橋供養。東嫩錦。柳の緑。玉落穗等あり。文政九年八月七日。六十八歳にて歿せり。

梅暮里谷我

通稱は反町與左衛門。葬亭と號す。久留里侯の藩士にして。目付役を勤めたりと云。草子の戯作を好みて。金花夕映。山莊大夫。白狐通。傾城買。二筋通。江戸氣質。浪花櫻等を著す。文政四年九月三日歿す。享年七十二歳。辭世の句は。

折るゝとも響はのこれ雪の竹。

麻布狸穴曹溪寺に葬り。乘蓮信士と法名す。

櫻川杜芳

岸田氏。俳諧を善くして。言葉綾知と狂名す。戯作の草子に大通記。こぢつけ千本櫻おとあり。慈悲成は此門より出でたり。

## 櫻川慈悲成

俗稱飭屋大五郎。芝樂亭と號す。杜芳に從て青本の草子をかきあらひ。又寛政年中一枚摺といふ戯筆に名を顯せり。口合兄弟。繁升増つかき。嘘字盡しの類かり。草子の著には持來餅屋は餅屋。天筆阿房樂かき世評高し。初め狂歌を善くして。親の慈悲成といへり。杜芳の門に入てより。櫻川と改めつ。茶式に精しくして。諸侯の召に應じ。賓客の接待を以て。祿を得。また焉馬と俱に昔話を中興し。遂に落語家となりて口を糊せり。又今幫問者流に櫻川某と名のる者あるは。其源を慈悲成に發すといふ。

## 山東庵京傳

名は醒。字は酉星。醒々齋。又菊花亭と號す。岩瀬氏。通稱京屋傳

藏といふ。其家愛宕山の東京橋銀座に在るを以て。山東庵京傳とは戯號せしかり。家製の藥劑及び紙煙草入といふ物を鬻ぎて。生業とせり。始め畫を北尾政美に學びて。葎齋政演と號し。又狂歌を好みて。身輕折介といふ戯名あり。固より學匠といふにはあらねど。性質物に敏く。文才衆に優れて。十八の歳より草子を作り。其名都鄙に聞えて。小説家中興の翹楚たり。弱冠の頃より。放蕩にして。花柳の閭（ま）に徘徊せしかば。洞房嫖客の情趣を寫すに得意かりしが。それが爲め遂に官禁に觸れし事ありて。罪に抵れり。寛政三年の春かとよ。當時洒落本の風俗に害あるを以て。嚴禁の令あるに。猶錦の裏仕掛文庫といへる二種の小説を綴り。表紙に教訓讀本と題して發兌せり。此事忽ち露顯して。其夏京傳及び版元蔦屋重三郎とも。

町奉行所へ召上られ、兩人利徳に拘り、御下知を忘却し、御禁制を犯したる咎により、作者京傳を手鎖五十日、板元重三郎は身上半減の闕所、地本問屋行事二人も、商賣御構とあり、剩さへ古版の洒落本に至る迄、悉く絶版仰付られぬ。翁是より謹慎の人とあり、絶えて浮薄の文辭を綴らず、専ら教訓の草子を作り、又讀本をも著す、が翁の著述は行文平易にして、難語義訓かどを用ひされ、婦女童蒙にも通じ安く、殊に挿繪に趣向を盡したれば、是にも世間の喝采を博し、草子の體此時より一變したりと云ふ。晩に少作の世に裨益をかきを悔い、勵精刻苦して古籍遺冊を搜索し、近世奇跡考及び骨董集等を著す。考据精確、小史を補ふに足れり。文化十三年九月七日病死す。享年五十六。法號辨譽智海京傳とて、兩國回向院に埋葬す。

由亭馬琴

姓を瀧澤。名は解。通稱瑣吉を字とす。著作堂蓑笠隱居は別號あり。明和四年江戸深川に生る。後飯田町の家守とありしが、俗務を厭ひ、女婿に譲りて、男宗伯松前侯の侍醫たりが神田の家に同栖し。文政七年剃髮して篁民と號し。宗伯歿後、四谷信濃坂に移れり。天保七年馬琴七十歳の時書畫會を催し其集金を以て幕府御家人の株を譲り受けこゝに移住せしなり弱冠の頃京傳の門に入り、後神奈川に在りて卜筮を以て活業とせしが、寛政の始め洪水の爲に家財を失ひ、再び京傳に頼りて寄食し、半年計りよして、書肆蔦屋が店の主管とありぬ。馬琴始めての戲作も、寛政三年出版の廿日余盡用、而二分狂言といふ草子あり。是に、京傳門人大榮山人作と記せり。大榮山人とい



ふ由り。翁深川の。大榮山永代寺門前に生れたればあり。然れども晩年。大榮山人の名ある草子は坊間を搜りて収没し。又京傳門人といふ事も深く秘匿してあらぬ様に振舞ひかは。世に此事を知る人稀なり。同五年に至りて。曲亭馬琴とは改めき。是もと曲輪馬琴と戲號したればなり。それより引續き黄表紙合巻の述作多かりしが。讀本の著に最も其名を轟かせり。天下後世其風を學べども能く及ぶ者あるを聞かず。翁の學識詞才は唯も稱する所なれば今更にいはじ。當時京傳馬琴を指して。小説家の雙璧と稱せりといへども。惟ふよ京傳は只才を憑りて俗を甘んじ。馬琴は學に誇りて自ら高うす。是を以て著す所小説の中。老農估客と雖も能く故事を語り。理を辨ず。又隨筆として著はせる。立同放言烹雜の記。燕石

雜誌の類。引書該博。論說高雅。決して京傳の下風に立つ者にあらず。然れども却て博識を衒ふの譏りありとか。任他今古稗史家の中。此翁の如きとなかるべし。生涯著す所の小説雜書も。刊行のもの二百九十餘筆に及べり。中にも八犬傳の如き。全部五十八卷の多さに涉り。今に至りて世人に翫賞せらるゝもの。源氏物語水滸傳にも譲らじをや。此他未刊の筆記雜纂。或は五丁十丁の考說等を數ふるに違あらず。實に小説家の泰斗と推すべし。老年明を失ひて後は。媳婦琴童に口授して。綴らしめしもの多かりと云ふ。當時小説の流行に従ひ。人々趣向の新奇を競ひ。盛に文を舞はすの餘り。官禁に觸れ科を受くる者。京傳種彦春水の如き。前後皆然り。翁のみ生涯さる事も聞えず。年々戲作の筆を擱かざりしは。平常の用心厚

かりとに依るなるべし。嘉永元年十一月六日病て歿す。享年八十二。法號著作堂隱譽蓑笠とて。小石川茗荷谷深光寺に葬る。辭世の歌と云傳ふるは。

世の中の役をのがれてもとのまゝ。

かへすぞあめと土の人形。

附て記す。馬琴は多く人に交はるを好まざりしが。本居宣長翁の學風を慕ひて。其孫内遠翁に交はる事。極めて厚かりき。常に名古屋に知友ありと記せるは。内遠翁を指せる也とぞ。又八犬傳巡鳥記を著はす時。一冊稿成る毎に。伊勢松坂なる和學者殿村常久小津久足に校訂を請へり。彼の犬夷評判記(黒標紙に擬して八犬傳巡鳥記の趣向文章を批評せしもの)は。全く小津殿村の筆著さびなり。

十返舎一九

名は貞一幼稱幾次郎。後與七を通稱とし。醉齋と號す。駿府の町同心重田與八郎の二男なり。壯年に及び。某侯小田切に仕へて小吏たりしが。性來放蕩無頼にして。花柳の地にのみ遊び暮し。遂に家財をも賣却して酒にうへ。果ては大阪に亡命せり。斯くて文才あるものから。彼地の淨瑠璃作者に交らひ。若竹笛躬並木千柳と共に。木下蔭狹間合戦といふ院本を合作し。近松余七と著名したり。是れ寛政元年の事なり。同六年浪花を去て江戸に下り。十返舎一九と號し。草雙紙滑稽本を作りて大に世に行はれぬ。十返舎の號は。一九始め志野流の香道に熱心にて。黃熟香の十返をとりにて。然稱へしを。戯作の名にも用ひしなり。著す所の書。讀本合卷の草子もありと雖も。

尤も滑稽本に長じたる事。人の知る所なり。一九の行事に奇の又崎なる譚あまたありて。近代奇人傳にも見えたりといと長ければ載せず。天保二年八月七日。齡六十八才にて歿せり。淺草善龍寺内東陽院に葬り。心月院一九日光と法號す。辭世の狂歌は。

此世をばとりやれいとまにせん香と。

共に遂には灰さやうなら。

式亭三馬

名は久徳。字は太輔。菊地氏。通稱西宮太助といひ。式亭三馬と號す。本町庵。四季亭。洒落齋。哆囉哩樓。游戲堂。皆別號なり。三馬幼き時。本石町なる書肆翫月堂に傭使せられ。長じて後。山下町なる書賈萬屋太治右衛門の女婿となりしが。配偶の婦死

去せしかば。其家を去りて復姓し。四日市に小書店を開き。旁ら戯作を業とせり。後又石町新道に移り。遂に本町二丁目に卜居して。江戸の水並に家製の藥劑を商なへり。三馬幼少より頓智あり。好みて草雙紙院本を讀み。晝夜手を離す事なし。寛政六年。始めて天道浮世の出世線といふ小冊子を戯述せり。此時齡十八才なりき。それより引續き述作する程に。寛政十一年。俠太平記向鉢卷といふ草子を著しけるに。當時所謂俠客なる者の怒る所となり。遂に官に訴へられて。三馬意外の罪を得つ。されば。其父及び親戚の人々。將來を慮りて。戯作の業を廢止せよと誠めしかば。三馬聽かず。いよく戯作するに隨ひ。其名ますます高くなりぬ。三馬元來著作に敏捷にして。稿を草するに三日三夜にして。凡そ十餘卷の書を脱成す。

二葉三葉の戲言の如きは筆に従ひて滑稽湧出。人と對話の中に文を成す。故に其著甚多。中にも滑稽本洒落本は。三馬が高名を博せし所にして。浮世床。浮世風呂(滑稽本)辰巳婦言。船頭新話(洒落本)など其冠する物なるべし。合卷の草子にも。雷太郎強惡物語。坂東太郎強盜譚など名高く。讀本には河漕物語。梅精奇談などあれど。さしたる事なし。文政五年閏正月六日病て死す。享年四十八。深川雲光院に葬る。法號を歡譽喜樂奏天といふ。

爲永春水

名は貞高。佐々木氏。通稱鶴鷄正輔といふ。俗稱越前屋長次郎。もと書買にして青林堂と號す。始め式亭三馬の門に入て三鷺と號し。後二世振鷺亭と號す。又初代楚滿人が女に請ひて。

其戲號を受け繼ぎ。二代目南仙笑楚滿人とも稱せしが。故ありて其號を返し。文政十一年爲永春水と改めぬ。書店を閉ぢて後。一時耀書ビョウショとなりしが。程なく廢業して浮世購談師となり。金龍山人と號せり。當時淺草寺地内に住まへばなり。されど戲作の書世に行はるゝに及び。又舌耕の業を廢して。専ら著述に従事せしか。例の梅をよみ。辰巳の園。英對暖語。梅見の舟。等の人情本の爲に。公儀の咎めを蒙れり。是天保十三年の事なり。其申渡し書は左の如し。

神田多町壹丁目五郎兵衛店

爲永春水事 長次郎

其方儀繪本草紙の類。風俗の爲に不相成。猥々間敷事。又は異說等。書綴り候作。出候儀。無用可致旨。町觸相背き。地本

屋共より誂へ候とて。人情本と唱候小冊物著作致。右之内には。婦女の勸善にも可相成と心得違致。不束之事ども書顯し。剩へ遊女放蕩之體を。繪入に仕組遣し。手間賃請取候段。不埒に付手鎖申付る。

かくて手鎖中に水腫を病て歿す。其年七月十三日なり。法號龍音信士。築地本願寺地中妙傳寺に葬る。

柳亭種彦

名は知久。源姓。通稱高屋彦四郎とて。幕府旗下の士なり。愛雀軒。足薪翁とも號す。又別に脩紫樓の號あるは。其著脩紫田舎源氏の。大に行はれしに因てなり。始め天明風の狂歌を嗜みて。柳の風成と號し。後心の種俊と改む。戯作に柳亭種彦と號せしは。柳の某の狂號より柳亭と稱へ。又俗稱彦四郎といふ

からに。世人種俊の彦と呼べり。仍て俊の字を省き種彦とは名告りしなり。種彦また俳諧の古調を好みて。秀逸多く。俳名木卯と號せしを。ある人譏りて。柳は木扁に卯にして卯にあらずとて。

おのが名のつくりを知らぬ。點者りな。

と嘲りしに。種彦謂へらく。柳を卯に書く事。俗字ながら古きよりの例なり。正親町公道卿の雅筵醉興集に。乙卯の歳を。くる年や。柳の文字の扁つくり。

とよみ給へり。とて。依然木卯の號を用ひぬ。翁平生茄子形の硯を用ひ。其蓋に自詠の狂歌を彫らせたり。いはく。

名人になれく。茄子と思へども。

とにかくへ。たは離れざりけり。

いと面白し。戯作の草子あまたあれど。合巻を以て得意とす。正本製も翁の創意にして。世評よかりき。讀本に淺間嶽面影草紙。逢州執着譚。緞手措昔人形等。世に聞え。人情本に縁結月下の菊あり。院本風に綴りしもの。勢田橋龍女本地はいと奇らし。此外近古の逸事。風俗調度の考索を好みて。隨筆の書を著はせり。用舍箱。還魂志料。骨董ほりかへ。足薪翁百話。此餘種々の考説あまたあり。田舎源氏の著は。尤も苦心したる所あり。これより大かたの草雙紙も。繪様に注意し。彫刻を精密にして。從來の風を一變せり。されは此書大に世にもてはやされて。遂に源氏香。源氏鮎。源氏煎餅。源氏蕎麥等。源氏の字を冠らす者多く出來ぬ。以て流行の景狀あやまを想ふべし。然るに天保十三年六月物の本書ほんかき所謂著述家數人科かを蒙りしが。春水

は勿論戯作者からぬも。寺門靜軒も。武家奉公構と成。支配頭永井五右衛門の斟酌にて。種彦を私邸へ呼び。口頭を以て申渡し。は。其方に柳亭種彦とか申す者。久しく厄介に相成居る由。其者戯作致候事。風俗に關り宜しからず候間。早々外へ遣し。戯作相止めさせ申すべし云々とありし由。此事若し公あきの沙汰とならば。無論扶持高召上らるべきを。永井の計らひ忝かたじけなくなると。種彦いたく感喜したりとぞ。其年七月十八日病て歿せり。享年六十。辭世の句。  
散るものと定まる秋の柳かな。

源氏の人々のうせ給ひむも大かた秋なり。

我も秋六十帖を名殘かな。

法名芳寛院殿勇譽心禪といふ。赤坂一ツ木淨土寺に葬る。

## 林屋林泉

初め林屋正藏と稱して。落語家となり。中頃二世鹿野武左衛門と改め。世俗謂ふ所の怪談噺の元祖となれり。性來文藝の才あり。書を能くして狂歌を嗜み。又義大夫節を語るに巧みなりきとぞ。天保六年の春。剃髪して林泉と改め。程なく還俗して。正藏の舊名に復せり。草子の著述には先開三舛の世界。帶屋ね蝶三世談敵討鶉權兵衛。怪談春雛鳥等あり。天保十三年二月病て歿せり。臨終の際親戚故舊を枕邊に集へ。一箇の紙包を出して遺言すらく。此ころ余が年來秘藏せし品なれど。亡き後に遺し置きて。人に見られんも耻かしければ。構へて我棺中に収め。茶毘の煙りとなしてよと有ければ。歿後さるかたに取収め。火屋に於て例の作法に行ひたるに。何ぞ

量らん彼包は。鼠花火と云ふものにて。焰火四邊に散亂じ。大に會葬者を驚かしたり。林泉いかに生涯怪談を業としたればとて。死後迄もかゝる悪戯をなして。人を謀りしは。餘りに甚たしと云ふべし。

## 岡三鳥

名は長盈。字は哲甫。通稱島岡芳右衛門と云ひ。竹の戸また丹前舎と號す。始め神田四軒町なる麾下の士。近藤某に仕へ。中頃故ありて流浪じ。駒込大番町に住せしが。いつの程にか舊主に歸參する事を得つ。始め曲亭馬琴の門に入り。節亭琴驢と號じ。文化五年の春。始めて「驛路春鈴菜物語」といふ讀本を著はせり。其後文化七年に至り。其師馬琴へは一應の協議もなく。去つて式亭三馬の門に入り。岡三鳥と改めしかば。馬琴

大に憤り。書を三鳥に寄せて交りを絶てりといふ。元來狂歌を嗜み。又能筆にして備書するもの多かりき。著述には。右鈴菜物語の外に。善光寺詣。廿三夜待。如月初午。江戸名所花曆など世に聞こゆ。

## 曉鐘成

鐘成は木村氏。通稱彌四郎と云ひて。大坂元福井町。和泉屋太兵衛の四男なり。家もと醤油醸造を業とせしが。鐘成は幼きより讀書を好み。長しては放蕩にして家の業を顧みざりしかば。父なる者若干の資財を與へて分家せしめき。是より鐘成は天王寺中寺町に草菴を營み。庭に眞萩を植ゑ。鹿を飼ひ置きて。鹿の屋眞萩と戲號し。好める戲作に口を糊くちし。晩年鶏鳴舍晴翁と號し。入道して一禪ともいへり。中頃心齋橋通り

博勞町に轉住し。味噌を造りて商へり。うれも手前味噌。悋氣の焼味噌など種々なる奇名を負ふたるもをか。其後是をも門弟に譲りて。自らは又江戸堀南通貳丁目に家を造りて。専ら著述を業とせり。曲亭馬琴が傑作。朝夷巡鳥記の續編を綴りしも。此頃の事なるべし。一年妻の縁家を尋ねて。丹波國福智山に遊びしに。折節郷士百姓等城主朽木近江守の處分。不服の筋ありて。強ひて事を訴へんとせし折柄。鐘成の文才あるを聞きて。願書等の起草を請へり。かゝれど百姓の願意上達せず。遂に竹槍席旗の騒ぎと迄なりし時。又請はるゝまゝに檄文を草せり。鐘成性來俠氣あれば。爰に臨みて身を避るに忍びず。果ては推されて首領とさへなれりとぞ。此騒動に朽木家の老臣某謀殺せらるゝ。抔事態容易からずと



て鐘成を始め主謀の者共京都へ引致せられ。鐘成も獄に繋  
がれ。萬延元年十二月十九日獄中の鬼とあれり。享年六十八。  
實は毒殺あるべしと云ふ。遺體は大坂の親族引取り。攝津西  
成郡浦江村正覺寺に葬れり。法名釋道觀とぞ。

烏亭焉馬

通稱は和泉屋和助。中村氏あり。本所相生町に住し。狂歌を能  
くして。桃栗散人柿發齋と稱す。又元番匠の子あるを以て。野  
見てうかぞん墨金とも戲號せり。曾て五代目市川團十郎と  
兄弟の契を結ひて。一號を立川談州樓と云へり。其居所。里俗  
に堅川通りと云ふに依て也。安永寛政の間院本小本の戯作  
多し。中にも碁太平記白石噺と云ふ院本大に行われ。今も折  
々劇場にて演ずる事あり。且年來廢絶したる落語をも再興  
して。社中數多ありき。此等は小説に縁かければ大かた略せ  
ぬ。文化五年六月二日歳八十にて歿す。法名三樂院壽徳焉馬  
といふ。本所表町最勝寺に葬る。

感和亭鬼武

通稱前野曼助。初め曼亭と號し。後感和亭と改む。某藩士に  
て。元來算術に精しく。劍法に達せり。致仕の後市井に隠れ。京  
傳を師として。戯作を業とし。冊子の著多き中に。自來也物語  
は浪花に於て。戯曲にも演じぬ。以て其世に流行せしを知る  
べし。鬼武は文化の末に身まかりつとは聞かれど。年月確な  
らず。

山東庵京山

京山は京傳の義弟あり。名は百樹。通稱利一郎。字は鐵梅。又鐵

筆堂覽山。方半居士と號す。始め笹山侯に仕へしが。多病の故に致仕し。京傳歿後。舎兄の後を承け。家法の製藥等を嚮ぎ。旁ら印刻と戯作とを業とせり。京山性來篤實謹厚にして。義兄の品行に似ず。されば敢果なき草雙紙にも。婦幼教訓の意をこめたり。又歴世女裝考を著し。に。材料を輯むる廿五年を盡したりとぞ。其四冊は上梓して世に行はる。考證精確尤も温古の資とするに足る。天保九年二月齡七十の時。剃髪して涼仙と號せり。其後安政五年の秋。一女の彦根侯に宮仕へするを訪ひ。其局に一泊せしが。翌朝起出でされば。女怪しみて能く見るに。既に事切れさり。夜のまに卒中風や發しけん。と云。九月廿四日の事なり。其年の夏。京山暴瀉病に罹りしが。忽ち怠りたるを悦ひて。

野邊送りけふも八十通り町。

九十の命ひろふ床あけ。

法號榮隆院自默京山居士。享年九十二。本所回向院に葬る。

東里山人

俗稱細川浪二郎。九陽亭又鼻山人と號す。始め麻布三軒家に住みて。幕府の士なりしが。京傳の門に入て戯作を事とし。籬の花。契情肝粒志杯を著はして。其名を知らる。元來放縱にして。家を失ひ。縁家知友の方に流寓せしか。晩年芝切通と云ふ所にて。傳授屋と云ふ事を始め。奇方妙術などを片紙に記して之を賣り。かすかに口を糊し。が。後こゝをも去て四日市の店棚俗に床見世と云に移り。安政六年九月某日歿す。享年七十四才なりき。

時太郎可候

可候は有名なる浮世繪師。葛飾北齋の事なり。御用鏡師中島伊勢が男にて。幼名時太郎後鐵二郎といふ。故に草子の作名にも時太郎可候と記せり。又是知齋錦袋舎魚佛等の別號あり。始め繪事を勝川春章に學びて。春朗と稱せしが。故ありて破門せられ。自ら叢春朗といひ。後俵屋宗理が遺跡を續きて。二代目宗理となれり。寛政十年の頃。自ら一派の畫法を立て。北齋辰政と號し。後雷信また戴斗とも改めしが。皆弟子に譲りて爲一と稱す。繪事は絶代の妙手にして。唐畫の筆法を以て浮世繪を工風し。錦繪繡像讀本草冊子の插畫などに。人目を驚かし。一流の畫風公聞に達し。將軍家御成先に於て。席畫の上覽度々ありき。文才もありて。自畫自作の草子も夥し。

けれど。畫筆に雷名を轟かせり。可候行狀に崎談多けれど。今は省けり。平生書室に寢具を敷き。眠りを催せば。則ち臥す。覺むれば。晝夜筆を把て。室内清掃の事をせず。家に衣服器財を貯へず。持佛さへなかりしかば。或人祖師の木像を得させしが。厨子なければ。春慶塗の重箱といふ物を。針にて柱にとりつけ。其中に安置せり。又人の生魚杯贈るがあれは。割烹の煩ひありとて。やがて人に與へつといふ。其清貧想ふべし。嘉永二年四月十八日。享年九十歳にて歿せり。辭世の句は。人魂で行く氣さんじや夏原。

法名南總院奇譽北齋信士。淺草新寺町誓教寺に葬る。

一筆庵英泉

名は義信。字は英泉。溪齋亦無名翁と號す。通稱池田善次郎始

め青雲の志ありしが。讒者のため退けられぬ。元來狩野白桂齋の門に入り。畫を能くせしが。浪人の後。獨立して浮世繪師となす。溪齋英泉と稱せり。是より。放蕩無頼の人となり。飄々として住所を定めず。紙鳶。羽子板。織。行燈の畫。何にても人の需めに従りて辭する事なし。錦繪冊子の挿畫數十部を描き。娼婦の姿をさへ寫さけれども。絶えて俳優の似顔を物せず。性來草子を讀む癖ありて。通霄眠る事を忘れ自ら筆を把て。戲作の草子を綴るに至れり。又曾て演劇作者篠田金治の門に入り。千代田才市と稱せし事ありき。嘉永元年七月廿三日病て歿す。享年五十七。辭世の狂歌は。

限りある命なりせばをらからぬ。

たゞかなしきは別れ也けり。また

いろとれる五色の空にのりの道。

心にかゝるくまとりもなし。

美圖垣笑顔

通稱美濃屋甚三郎。愛亭と別號し。中頃書肆を開きて涌泉堂と號す。元來狂歌を嗜み。眞顔の門人となりて。涌泉堂眞清といへり。戲作の書多き中に兒雷也豪傑譚といふ合卷尤も行はる。晩年芝田町に移り。弘化三年九月そこで歿せり。

乾坤坊良齋

通稱梅津良助。神田松田町に住みて。貸本を業とせしが。三笑亭可樂に従ひ落語家となりて。菅良助と稱し。後軍書讀となりて良齋と改む。戲作の草子も數多あれとも。尤も舌耕の趣向に富めば。歿後うれが口演を種子とし。演戲または合卷草

子に綴りし者もありて之を良齋種と云へり。万延元年八月十三日九十二歳にて歿す。法號乾坤坊良齋畫勝といふ。淺草阿部川町延命院に葬る。

二代目焉馬

通稱賞二郎と云。町與力山崎助左衛門の男なり。七國樓と號す。其家深川古石場に在りて。武相甲豆駿房總の七州。眼下に見ゆれば也。狂歌を嗜み。始め伯樂舎に就て松永樓永年と號し。又六樹園に學ひて蓬萊山人とも云へり。ある時は吉田追風に請ひて。角觥の行事といふ業をもせしが。文政十一年二代目焉馬の名を繼けり。其後弘化三年十二月。故ありて近松門左衛門と改め。中村座の演劇作者となりしが。名のみは人を驚かして。著作にさしたる物を見ず。文久二年七月廿三日。

越前堀の家に歿す享年七十一。法號松樹院緣譽淨月居士。小石川大雲寺に葬る。

松亭金水

名は保定。通稱中村源八といふ。始め金川に従て書を學び。神田大和町に住みて手跡指南を業とせり。何如なる縁ありてか。春水の人情本を淨書する事屢にして。遂に春水の口調を覺り。自らも人情本を著はせり。されは金川と春水の一字つくをとりにて。金水とは號せし也。又一號積翠道人ともいへり。諸所に移住し。晩年には本郷附木店と云ふ所にありて。戯作を専らとし。うこにて身まかれり。享年六十六。時に文久二年十二月十二日なりき。牛込榎町大徳寺に葬る。法名了悟院金水日松信士と云。辭世の哥といふは。

むろぢ餘り六とせのけふを命よて。

うき世の夢はさめはてにけり。

笠亭仙果

名は廣道。通稱彌太郎。高稿氏。字は子田。轍齋と號し。又狗々山人。招祿翁等の別號あり。家世々尾張國愛知郡熱田驛に住し。熱田神宮領の里正たり。幼き頃熱田の祠官。磯部政春に就て句讀を受け。長じて高松中納言を仰きて詠歌の點を請へり。又離屋翁はなれやのおきなに従ひて。狂歌をも習ひ。四世淺草庵の號を繼げり。仙果箕業を受けしより。不幸にして家衰へ。産を失ひてければ。遂に江戸に出て。戯作して生業とせり。是より先。仙果郷里にありける頃より。初代種彦を景慕し。書を寄せて門人となり。冊子の稿を師の許に送りては。校訂を乞ひ。潤筆の料を要

せず。冊子の發兌を冀ひしかば。種彦懇に訂正し。且序跋杯添へて。書肆鶴屋に進めて發行せしめき。仍て鶴屋は種彦へ校訂の謝儀として。些少の金を贈りしかど。種彦は自ら受けず。直は仙果の許へ遣はたりき。斯くする事屢々にて。仙果の著漸く多く。其名遠近に聞えければ。仙果ひろかに思ふやう。書肆そ若干の潤筆料を出すべきに。種彦其多分を沒收し。我には薄謝を贈るならんとて。江戸に來るや。旅裝の儘に鶴屋の店を過ぎ。名刺を通とて先づ潤筆料の事を問ふ。鶴屋の主人答ふるやう。貴著濡筆料を要せずとあれど。柳亭先生序跋など添へられ。うれが爲め世に行はるゝなれば。先生への謝儀として。聊の料を送る由を答へしかば。仙果赧然して大に師翁の清廉を感じ。さて後ぞ種彦が訪らひける。然るに此事鶴

屋より柳亭の方に洩れ聞えければ種彦も仙果の腹ぎたなきを憤り。仙果も面目を失ひて。自然師弟の交りは絶えにけり。種彦歿後。繼に二代目柳亭種彦と稱せしが。同門の先輩等より故障出で、種秀と改め。種ひてと假名がきにしるも。世人を瞞着せんとてなるべし。是等の行爲に書肆の信用を失ひ。果ては甚だ困窮せりとぞ。併しながら仙果希代の達筆家にして。草雙紙の合巻などは一晝夜に二冊の稿を脱し。剩へ挿繪の趣向表紙の工夫に迄及びきと云ふ。仙果は慶應四年二月九日。享年六十三才にて歿す。本所仲の郷東盛寺に葬り。法號忠山宗儀居士といふ。

## 津打治兵衛

治兵衛は江戸演劇作者の鼻祖と稱す。抑も從來の脚色は。多

くは俳優の自作にして。別に脚本の作者としては無かりきと云ふ。されは治兵衛も元は大坂の俳優に。親父形津打治兵衛が子にて。俳名を英子と云へり。元祿の末より専ら演劇の脚本を綴りて。二河白道の狂言に名を顯はし。後江戸に下り寶曆三年。市村座に於て淡島榮花掣といふを作り。淡島に清立の事跡を仕組みしに。此劇大に行はれて。其名都鄙に籍甚たり。大かた時代狂言に世話事を取組み。趣向に興ある事をかこゝが。曾我の演劇を世話狂言に合する事も。治兵衛より始まれりと云ふ。一とせ雜司ヶ谷の鬼子母神へ扁額を奉納せし者あり。其繪に地獄の秤に。一方は津打治兵衛。一方は座方の俳優多數を懸けて。尙津打の方重き狀を畫けるにて。世に重んぜられし程は知らるゝ也。治兵衛は寶曆十年正月廿日

行年八十餘歳にて歿せり。法名勇健院英子日雄。辭世は。

玉の緒のありたけ空をかきつくじ。

今ぞ冥途の道作りなり。

並木正三

正三は幼名を久太郎といふ。大坂道頓堀宗右衛門町に生まる。父を和泉屋正朔と云ふ。一説に高砂屋平左衛門寛延二年始めて演劇作者となり。和泉屋正三と云へり。後院本の作者並木宗助に従ひ。並木の姓を稱すれとも。元來演劇の著作に秀で、古作の脚色を翻案するに妙なりき。されは名作と云はる。脚本多き中にも、宿無團七時雨の傘井一名岩霧太郎天狗の醜傾城天羽衣。桑名屋徳藏入船話。三十石艦始日本第一和布刈神事等。一わたり聞えしは猶あるべし。又當時迄は何れの

劇場も舞臺の中央に大臣柱とてありしを。看客の目障りなりとて。正三工夫して之を除き。又せり上。廻り道具。三段返などをも構へしは。皆正三の創意なりとぞ。されは劇道の大家と仰かれ。看板に作者の名を著し、如きも前後に例を見ずといふ。此等正三か名譽の物語は。並木正三一代噺と云小冊子あり。安永二年二月十七日。同輩兩三と酒宴の席に於て。突然卒中風發して斃れぬ。行年四十四。中寺町法善寺に葬り。當譽達雪信士と法號す。臨終の際。同席せし人々。さめに碑を建て、南無三寶正三墓と記せり。こは正三發病の時。南無三寶と叫びて卒倒したれば也とかや。

並木五瓶

五瓶は大坂道修町の産にて。通稱を吾八と云へり。初め辰岡



萬作に従ひ。後正三の門に入て並木と稱す。著作の脚本多き中に。金門五山桐。島廻戯聞書杯尤も佳作と稱す。五山桐を綴りしは安永六年の事にして。時に五瓶は二十九才なりきと云。島廻といふ劇は。初め三段目までは琉球の事にて。興味薄けれど。四段目よりは例の五大力の趣向にて。世人の喝采を博しより。されは寛政六年十月。都傳内座の聘に應じ。始めて江戸に下りし折也。翌年の春狂言には。彼島廻を改竄して。五大力戀緘と題し興行せり。但し五大力の原は。近松門左作の小万源五兵衛薩摩謠に基き。辰岡萬作の更に趣向を構へしものを。五瓶聊刪潤して。己が述作と披露せし由ある書に見えより。うは兎まれ此狂言世評高くして。興行の日數七十餘日に及べりと云ふ。後又浪花へ歸り。再び江戸に來り。文化の

頃まで三都に於て。述作せし脚本數百部ありとなん。其重なるは鍋祀貞婦競。日本花赤穂鹽竈。棹歌木津川八景。袖簿播州巡。歸命曲輪文章。契情黃金鱗。傾城忍術池。傾城倭莊子。人間詞大名賞儀。天滿宮菜種御供。傾城落島。契情誰伏水。平井權八吉原衛。傀儡淺妻船。源平柱礎層。隅田春妓女客性。梅の由兵衛の狂言也富岡戀山開。出村玉屋新其他猶あるべし。中にも五大力は尤も時好に投じたりと見え。數十回興行し。今も折々演ずる事あり。五瓶は文政五年二月二日。東都に於て歿す。行年六十二。深川靈岸寺うち正覺院に葬る。法號彩嶽英藻信士。辭世の句は。  
梅は咲く我は散り行くきさらぎや。

壕越菜陽

菜陽を始め澤村二三治と稱し。延享の始めより市村座の演

劇作者となり寛延二年壕越菜陽と改め森田座に聘せらる。「初雪伶人袖」といふ劇を著はして世に行はれ。寶曆元年の冬、中村座に行きて本領鉢木染を作り亦評宜かりき。其後一度西京嵐三右衛門座の聘は應じ程なく江戸に歸り蟾兔湊淺草鐘愛護曾我等の狂言を物して世に稱せらる。菜陽殊に一幕切の淨瑠理に趣向を盡す事得意なりきとぞ。

金井三笑

三笑は寶曆四年始めて中村座の作者とあり。後森田座に移れり。初め三平と云ひ明和二年の春三笑と改む。俗稱金井筒屋半九郎と云ふ。名作と稱せらる狂言多き中に寶曆九年「梅紅葉伊達大門」と云を著はせり。是は奥州攻の世界に紅葉狩を取組たる也。同十一年春江戸紫根元曾我」と云ふに助六れ

七の事を取合せたる杯大に世に持て囃されぬ。三笑は廣く趣向を構ふると雖も結未能く收りて毫も破綻を顯はさず。之に仍で常に世評宜かりきといふ。

櫻田左交

左交は通稱治助と云ふ。壕越菜陽の門人にして寶曆の末より演劇の筆を把て尤も世話狂言の脚色に得意なり又狂言名題及び角藝題小書かどにさへ至巧にして自ら一流をなせり。故に人之を櫻田風と稱す。又狂言臺詞の中へ時好の事流行の詞を交へて巧みに前後を綴り新奇を述べて人の心耳を娛まじむ事頗る妙あり。元文元年の春中村座に於て俳優市川八百藏再勤し出村新兵衛に扮する時外題を罷出村助花」と記し翌年八月の演劇に月視月餘慶仇討」と題せしは其

頃餘慶の仕事と云ふ詞一般に流行し。八月閏月にさへ當りしかば。うれをも兼ねたる言ぐさり也とぞ。是等は字義を爲さぬに似たれど。此道の習慣にては。尤も稱すべき秀句なるべし。寛政十一年の頃。市中の婦女瓢の簪流行し。其冬森田座に於て。太閤記を演ずるに。該座の作者村岡幸治。彼櫻田風に擬して。八百八丁瓢ひょうかんざの簪かんざしと外藝せり。世に之を喧稱せしが。左交聞て余が考案にては。八百八丁瓢ひょうかんざ指物さしものをすべきと云へりとかや。左交屢家を移す癖ありしが。晩年永く花川戸なる柳の井の側に住して。花井隣と戲號せり。後又淺草寺中辨天山に廬を結ひ。うこにて身まかれり。時に文化三年六月廿七日なり。享年七十三。辞世の句は。

花清と散りても浮む水のうへ。

下谷わら店法養寺に葬り。法名默了院左交日念信士といふ。左交は特に淨瑠璃謠ひ物の文章に巧にして。其著百貳拾餘曲あり。何れも佳作なりと聞ゆ。されは存生中。淨瑠璃塚を築かんと志し。が果さずして歿せしかば。死後一周の正忌に。門人等塚を柳島妙見寺の境内に立て。碑に辞世の句を彫刻して。今に残り。

因に云長島壽阿彌翁の雜記中。作者の事を云へる條に。我江戸に作者五人と稱す。所謂五人は。津打英子。藤本斗文。塚越菜陽。金井三笑。櫻田左交なり。左交簀を易るに臨て。遺言して曰く。吾歿後。佛事作善を願はず。務めて江戸狂言を絶滅すべりちす。今より三十年を経ず。京坂の如く。狂言は役者より出づべし。努力して此弊を防げよと。言終て死す。果

して其言の如し云々

## 鶴屋南北

鶴屋南北と名告る者。數人ありき。前三代は俳優の道化方ありしが。四代に至りて。始めて演劇の著作を業とす。四世南北は。幼名源藏。後伊之助と改む。元濱町に生る。父は紺搔きの形付といふ事を業とせり。安永四年。金井三笑の門に入て勝俵藏と稱し。後故ありて。鶴屋南北の名跡を承く。演劇脚本を作る事五十餘年。絶妙のもの甚多し。中にもれ染久松色うましの讀賣。隅田川花御所染。四谷怪談を佳作とす。劇道に之を南北物と稱す。又稗史の著述もありて。うれには姥尉助といへり。悉くは六樹園のかける碑銘にあれば。寫して左に掲げん。

鶴屋南北始めの名は勝俵藏。故ありて。鶴屋氏を犯しぬ。う

まれつき滑稽をこのみて。人を笑はす事をわざとす。終に歌舞伎の作者とありて。一世の間に名を顯はす。安永四年始めて堺町へ出勤す。歌舞伎作者の中にて。拔羣の才ありて。十種曲おとのふりをうつして。人の心にかかはん事を要とす。されど。ふみ讀むを嫌ひて。みづから誇るを。文政十二年霜月廿七日。年七十五才にて身まかりぬ。三の戯場の作者たる事五十四年あり。死にうせなんとする時。子弟等と呼びて云ひけらく。我に一大事因縁あり。枕上ある櫛くし笥げのうちにいれたり。あからん後披きて見よ。思ふ筋くいしく記してあり。よろくの人々。讀み見て是を守るべしといひて。目を眠りぬ。さて後。よろくら打寄て。笥げをひらきて見れば。上紙に「死出門松後萬歳」とかきてあり。讀て

見れば萬歳の唱歌を葬送に寄せて正本のやうに志るゝ  
てあり。皆くあきれてこれぞ最後の滑稽なるべきとて。  
ひろかに笑ひて去りぬ。其後廿月十三日押上なる春慶寺  
に葬りの事ありけるとぞ。

右の死出門松後萬歳といふは上梓志て會葬者に一冊つゝ  
贈りたりとす。今もたま〜傳りて家に藏す。本文は事長け  
れは爰には漏せり。其中に口上の文一篇あり。抄出して讀者  
に抱腹せしめんとす。

乍畧儀せまうはムり升れと。棺の内より頭をうなたれ。手足  
をちぢめ。御禮申上奉り升る。先は私存生の間。永々御蟲負  
なし下され升る段。飛去り升る心魂に徹し。いか斗りか  
有難く冷あせに存奉り升る。扱私事もとくより老衰に及

び升れば。皆々様の御機嫌をうこなはぬ内。早う冥途へ趣  
けと。是迄度々佛菩薩の靈夢を蒙り升れと。流石凡夫の淺  
ましさに。達て辭退仕升れと。定業はもたら難く。是非なく  
彼地へ趣き升れば。誠に此世の御名残り。いまはの際の死  
後れ。万歳太夫才藏兼升て。亡者の私舞納升る間。幾萬々歳  
御長久の各々様。御宗体の御回向の程。庫裏からすみまで。  
偏に奉希上る。

林屋正藏の鼠花火に比ぶれば。遙にまじたる洒落あるべし。

作者略傳終

明治二十三年三月卅一日印刷  
同年四月五日出版

(小説史稿)  
定價金五十錢

版權所有

著述者 東京市本郷區森川町一番地 關根正直

發行者 同市日本橋區本町三丁目十七番地 原亮三郎

印刷者 同 關幸吉

發兌 同 金港堂本店

大賣捌所 大坂久寶寺町四丁目十二番地 金港堂支店







